関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

書評　『清水好子論文集』第一巻～第三巻

著者	山本 淳子
雑誌名	國文學
巻	99
ページ	251-257
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/9247

書評『清水好子論文集』第一巻〜第三巻

山本淳子

一　本書評の目標

本書は、清水好子氏（以下敬称略）の全論文中、六十五編からなる選集である。書き出すにあたって、まずこの書評が目指す所を示しておきたい。それは、『清水好子論文集』が平安文学研究にもたらす今日的意義を明らかにすることである。

通常の研究書の場合、書評とは、収められた一つ一つの研究論文について批評し、さらにそれらがまとめられることによって形成されている研究の世界を批評するものになるだろう。しかし本論文集の場合、所載の諸論は既に学会に大きく貢献したものばかりであり、研究史における価値は今更言うまでもない。ただ、それは過去の価値であると考える向きもあるだろう。実際、本論文集が現在の時点で世に問われる限り、重要なのは「今なぜ清水好子なのか」ということである。

結論から言えば、評者は本論文集を読了して、ここにはいくつものヒントがあることに気がついた。今まで清水好子を読んだつもりでいたが、研究段階が進んだ今日の目で読むと、源氏物語を中心とした平安文学研究には未解決の仮説が未解決のまま多数残されており、その幾つかの入り口を、かつて清水好子は提示していたのだと再認識した。更に、今ここから出発することができる課題も発見できた。

したがってこの書評においては、清水好子の論について触れながら、主眼としては、編者たちが本書を世に問うたことの平安文学研究史における今日的意義を評したいと考える。

二　編者の意図

本論文集の編纂意図は、「巻頭言（刊行の趣旨）」において、編者・山本登朗、清水婦久子、田中登の三氏の連名により、まず次のように述べられている。

源氏物語と紫式部の研究において、清水好子氏（一九二一～二〇〇四年）の功績は大きい。昭和の研究史に残る国文学研究者であると同時に、幅広い活動をしていた女性として、今なおファンが多い。しかし、その論文集は『源氏物語の文体と方法』の他になく、それ以後の論文の掲載誌も入手しにくくなり、戦後四十年余りの研究の全容を知ることは困難になった。そこで、清水好子氏の学術論文を集成した『清水好子論文集』全三巻の刊行を企画した。

確かに、清水好子は生涯に膨大な数の論文を遺したが、論文集は六十歳を直前にして刊行された右の一冊『源氏物語の文体と方法』（東京大学出版会、一九八〇年六月）のみである。その中では、論文はテーマに随って整理され、初出時とは別のタイトルに改められるなど、清水自身による位置づけが行われている。だがそこから漏れたものは、清水の死によって、いわばばらばらに拡散していくことになる。

私事に係ることをお許しいただきたい。評者は高校生の頃、雑誌『國文學　解釈と教材の研究』（學燈社）等に掲載された諸論を通じて、清水好子の文章と出会った。その頃評者はむしろ現代文学や海外の文学に傾倒していたが、清水好子の文章は古典文学を対象としながら、それらと同等かそれ以上に自在に作品を読み解き、面白さを引き出して見せてくれるものであった。その時以来、彼女は私にとってカリスマとなった。しかし研究を始めた時期が遅く、生前の清水に会う機会は全くなかった。つまり評者にとって清水好子とは、ひとえに彼女の著作や論文なのである。したがって、その文章を固めて読むことのできる論文集は嬉しく有り難い。

だが、そんな評者のような読者に対して、本書は適切な助言を与えてくれている。「巻頭言（刊行の趣旨）」はこう言う。

女性研究者の少なかった時代、清水好子氏にあこがれて研究を志した者は多い。その流麗な文体と説得力に酔いしれて、仮説までもが確固たる事実のように受け入れられる例も見受けられる。偉大な研究者の説ほど一人歩きし、後学に与える影響力は大きいが、逆に、優れた研究者であれば論を発表する度に成長し研究は進展する。本論文集全三巻によって、一研究者の軌跡を知り、個々の論とその後の

展開を、冷静かつ客観的に読み直し、研究者諸氏の今後の研究に活かしていただくよう願うものである。

清水好子の論を無自覚につまみ食いしてはならない、というのである。後学自らその蓋然性を見極めたうえで扱え。また彼女の研究者人生を通じて、論がどのように生成され成長したかを見よという。そこには「冷静かつ客観的」という言葉さえ使われている。つまり本書は、清水好子の研究が没後十年にしてきちんと把握し直され、研究史上に正当に位置づけられたうえで今後の学会に継承されるようにと企図された論文集なのであった。

これには、二つの意味があると考える。一つには、本書が明記しているような、いわば信奉に近い読まれ方に是正の機会を与えるという意味である。そしてもう一つは、それとは対極にある、清水好子の研究を既に古くなったものと片付ける見方に対しても是正の機会を与えるという意味である。第二の意味については、本書自身はほとんど触れていないが、評者が強く感じたことであった。

三　構成と内容

本論文集は、三巻から構成される。各巻の内容は次のとおりである。

第一巻「源氏物語の作風」

源氏物語関係の論文を発表年代順に並べたうちの前半にあたる。掲載の論文には三巻を通じた番号が付され、京都大学の卒業論文である①「物語の文体」（初出　昭和二四年九月、京都大学『國語國文』）から、⑲「源氏物語における準拠」（初出　昭和四四年六月、『國文學　解釋と鑑賞』）に至る十九本を収める。巻の副題は、清水が論文タイトルに繰り返し用いた独自の用語である「作風」による。巻末に、編者・山本登朗氏による解説「清水好子源氏物語学の始発と展開」が付され、各論文のポイントを説いている。

第二巻「源氏物語と歌」

源氏物語関係の論文を発表年代順に並べたうちの後半にあたる。⑳「源氏物語における場面表現」（初出　昭和四六年五月、有精堂出版『源氏物語講座1』）から㊷「物語の表現」（初出　平成四年、勉誠社『源氏物語講座6』）に至る二十三本を収める。巻の副題は、清水好子が常に源氏物語の根底にあるものとして

見据え続け、しばしば論文タイトル名にも入れた「歌」による。巻末に、編者・清水婦久子氏による解説「清水好子・研究の経緯と変遷」が付され、大局的な視野で清水好子を紹介するとともに「本論文集を企画した第一の目的は、清水の正確な論を後世に伝えることである」と明らかにされている。

第三巻「王朝の文学」

源氏物語以外を対象とする論文を集め、「枕草子」章に六本、「日記」章に九本、「私家集・歌物語」章に八本の論文をそれぞれ収める。巻の副題は、これらが扱う多岐にわたる作品および資料を、大括りにしたものである。実際には、「日記」の章には藤原道長の「御堂関白記」、藤原行成の「権記」の読解と分析など、「文学」のタイトルから逸脱するものも含まれて、清水の研究対象の広さを実感する巻である。巻末に、編者・田中登氏による解説「清水好子、その豊饒な王朝文学の世界」が付され、一つ一つの論について、その多彩さや観察眼の鋭さなどを指摘する。

四　清水好子の今日的意義

ここからは、評者が本論文集に発見した、清水好子論文の今日的意義について述べたい。六十五編を通読して気づいたのは、清水好子の論は常に、作品の具体的な細部を虫瞰する視座から始まり、最後は作品全体を鳥瞰する視座に到達するという型に随っているということである。

例えば第一論文である「物語の文体」（第一巻①）では、まず源氏物語の文章には「異常に長い」内容を受けている名詞節が多いことを指摘し、具体例を列挙する。そして次が重要なのだが、それぞれの例について微細に観察し、その息遣いに至るまでを読み取る。一例を挙げれば、「総角」巻において、薫と中の君が結ばれることを望む大君の言葉「身を分けたる心のうちは、みな譲りて見たてまつらむ心地」（傍線評者）である。この冒頭部分「身を分けたる心」について、清水は「身こそ姉と妹の二つに分れているが、心は」のように訳したいところだが、それでは違う、と言う。それでは意味が下に流れて行ってしまう。本文は「身を分けたる心」と、「心」に意味を凝集させている。それにより、ここには自ずと「強調」が生まれている。清水はそう指摘するのである。こうした肉迫は他の論文にもほとんど必ず見られ、作品に対する清水の基本的態度である。

ところがその具体的・個別的な虫の目は、やがて右のような源氏物語の文体の根本に、漢詩文の影響を見出だす。下へ下へ

と意味が流れていく日本語に対し、漢詩文では複雑な意味が短い文字数の中に凝集されている。こうして清水は、源氏物語が基本的な思考の型において漢詩文を骨肉化していることを指摘するのである。

ことばという具体的な細部を入口としつつ、論に随って進むうちに、最後には作品全体を見渡す広々とした地平へと到達する。この方法は古典的なようだが、実は今日だからこそ切実に求められている手本だと思う。そのことは、例えばいま評者の手元にある、女性研究者三十四人が稿を寄せて今春刊行された論文集『源氏物語　煌めくことばの世界』（原岡文子・河添房江編　翰林書房、二〇一四年四月）のタイトルにも象徴されよう。作品とは何よりも「ことば」であり、作品読解とは基本的に「ことば」に厳しく耳を澄ませることであるということは、今日の学会が試行錯誤の末に辿り着いた合意である。もちろんそのためには依拠する本文に対する見極めが不可欠で、学会は今この「ことば」と「本文」とを二つの柱としている。観念に始まり観念に終わるポストモダン的研究方法は、研究史に実りをもたらしながら一旦収束し、これからはその実りの上に、もう一度清水のような地を這って山道を登る論が試みられてゆく。それはもう予感ではなく実際である。そのうえで、例えば清水が仮説として提示した「源氏物語作者の思考の型における和漢融合」などのような大きなスケールの問題を検証し、日本の文化史・思想史、また東アジアの文化史・思想史に位置づけてゆく。平安文学研究はそうした段階に入ったのではないかと、いま考えている。

付しておくが、清水好子のこの型は、源氏物語を対象とした論に限らず、また具体的根拠も多様である。例えば「典型創造の意図―枕草子の文体・敬語論―」（第三巻㊹）は、枕草子に「など」という例示の言葉が多用されることを入り口に、多種多様な事物から典型例を取り出してリスト化し、それらに評価を下すことが、女房に与えられた役目であったと推測する、枕草子と定子文化の本質を指摘する論である。ではなぜこの定子文化の遺産が、彼女とは基本的に対立関係にあったはずの藤原道長の権力下で生き残り、今に伝えられているのか。その大きな問題に、私たちは取り組まねばならない。国史学における平安時代研究が清水の時代に比べ飛躍的に進んだ今、論の進展する可能性は十分にあろう。

また「源氏物語絵巻への道―吹抜屋台の構図をめぐって―」（第二巻㉔）は、屏風絵はその絵の描かれる屏風が装飾目的の調度であるために、屏風絵をもとに作られる歌物語は四季折々の

特に屋外を舞台としていること、一方で紙絵は上から覗き込むものであるため作り物語と馴染んで、微視的な、室内の男女に焦点を絞る視覚を獲得し、やがて物語絵の「吹抜屋台」技巧を生んだと推測した、文学史と美術史を横断する論である。物語と絵との問題は、玉上琢彌の「物語音読論」も含めていまだに解明が進んでいるとは言い難い。やはり取り組むべきスリリングなテーマである。

不思議なことに、清水の論文を読んでいると、平安時代の人々の姿がありありと浮かんでくる気がする。それはひとえに、彼女が論中で列挙してみせる事例やそれに対する着眼点が、具体的かつ日常的であることによるのだと思う。

五　何のため、誰のための研究か

最後に、本論文集からうかがえる清水好子の研究目的を指摘したい。それは一つには、平安文学研究の前衛を担いそれを進展させることであった。特に初期の論には学問の先端を切り拓くような独創性と意欲が感じられる。一方で、清水は作品と読者をつなぐ活動に努力を惜しまなかった。古典作品の一般普及に向けた熱意は、例えば論文集に先んじて三十七歳の時に、教養書である『源氏の女君』（初版　三一書房、一九五九年二月　増補版　塙書房、一九六七年六月）を世に問うた態度からも明らかである。

しかしもう一つ清水が心に掛けていたのは、後進の研究者の育成ということではなかっただろうか。実は本論文集に、清水がそれを漏らした一言が見える。それは「物語の表現」（第二巻㊷）、本論文集の「著書・論文目録」を見れば清水の最終論文にあたる論中でのことである。ここで清水は、源氏物語の写実性が物語の構成に本質的にかかわっていることを説くために、「若菜上」のいわゆる猫事件をとらえ、例によって物語のことばに密着しながら、現場の建物の結構や人物の位置など空間設定の一つ一つを具体的に解説する。そこに括弧書きで、（教室でなら描くのですが）という言葉があるのである。

なぜこの一言を、清水は記したのだろうか。それは教室で教える思いでこの論文を書いたからに違いない。他のどの論文にも、彼女のこうした肉声はなかった。だが最後に、読者に自らの研究を託する思いが漏れたのではないだろうか。それを正しく受け止め、次に伝えたい。そう評者に感じさせたように、読了した研究者諸氏に研究への意欲を掻き立てさせることこそが、本論文集の何よりの今日的意義であると、本稿は考える。

（やまもと　じゅんこ／京都学園大学教授）